脳卒中患者におけるリハビリテーションのアウトカムに及ぼす薬学的要因に関する研究

申請者：小瀬　英司

【論文内容の要旨】

本研究は、回復期リハビリテーション病棟におけるリハビリ効果に対して、薬剤（とりわけ polypharmacy と潜在的不適切薬剤（PIMs））による影響中心に解析したものである。対象としたリハビリ病棟は３施設、リハビリ効果は運動に関する Functional Independence Measurement（FIM-M）にて評価している。得られた結果は、以下の通りである。

１）リハビリ効果に入院時服用薬剤数（polypharmacy か否かは不明）が関与していること、降圧薬と糖尿病薬の服薬が polypharmacy（服薬薬剤数５剤以上）となるリスクになりうること。

２）CKD 合併脳卒中患者（こうした患者に焦点を当てた意図は不明）では、糖尿病を有すること、FIM-M efficiency、年齢がそれぞれ polypharmacy（服薬薬剤数６剤以上）に関連しうること、polypharmacy が FIM-M に負の影響を与えること。

３）PIMs 服薬数の変化（増加）が、リハビリ効果、特に食事摂取行動に negative な影響を与えること、入院中に増加した PIMs には、抗コリン作用を有する薬物が含まれていたこと。

【審査結果の要旨】

本論文は、回復期リハビリテーション病棟で、薬剤師が積極的に介入し、ポリファーマーシーや PIM の問題を適切にコントロールすべきである現状を浮き彫りにした。また、リハビリテーションの効果とポリファーマーシー問題との関係は、これまで見過ごされてきた点であり、これに焦点を当てたことも特筆すべきである。今後、この分野での研究がさらに深化し、薬学の観点からもより良いリハビリテーションが目指されることを期待する。また、論文発表会と面接試験でも、審査員の質問に対して自身の考えを明確に陳述し、また適切に説明を行った。こうしたことから、脳卒中患者に関する専門知識はもちろん、薬学全般の知識も深いレベルで習得していることが窺い知れた。以上を鑑み、博士（薬学）の学位を授与するのにふさわしい学力を十分に備えているものと判断した。

平成 31 年 3 月

（主査）水谷　顕洋

（副査）渡邊　泰男

（副査）高野　昭人